

---

# はじめ

伊良

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

はじめ

### 【Zマーク】

N4212E

### 【作者名】

伊良

### 【あらすじ】

私はもう100年もこの世の中の移り変わりを見てきた。私はこの国の政治や庶民の文化、あらゆる戦争までも見てきた。いや僕はと言った方がしっくりくる気がする。僕の肌はきめ細やかでシワもない、髪も真っ黒でつやがある。そういうからか僕の体は成長するのをやめてしまったのだ。

## 1・プロローグ

私はもう一〇〇年もこの世の中の移り変わりを見てきた。私はこの国の政治や庶民の文化、

あらゆる戦争までも見てきた。いや僕はと言つた方がしっくりくる気がする。僕の肌

はきめ細やかでシワもない、髪も真っ黒でつやがある。そういうから僕の体は成長する

のをやめてしまったのだ。

そこで僕は考えたのである自分にできる事を。

そしてなぜ研究所でこのような研究が行われていたのか。

今は高校生をしている名前は、はじめ

## 2・高校3年生（前期）

普通の高校に通つてこゐははじめ

## 2・高校3年生

2・高校3年生

朝の太陽が昇りまだ肌寒い春の季節

「ぐく普通の進学校に通つてこるはじめはじめていつも通りに学校の門を駆け足で通つた。

「ガシャン」と鈍く鉄のぶつかる音がなるとすぐ口

「セーフ」息を切らすことなくはじめはじめていつも通り得意気に同じ言葉を言った。

「おじおい何がセーフだ」「いつもそんな調子じゃ就職なんかできないぞ」担任の藤原があきれながら言い放った。

藤原は教え子思いでどの生徒からも愛されている先生である。

「平氣、平氣」はじめは頭の上で手を振り背中で会話をしながらすたすたと校舎へと入つていった。

下駄箱で靴を履き替えて廊下を歩いていると前方がずりりと並んだクラス替えが貼り出されていた。

1から8組まであるクラスの中ではじめは理系の特進クラスの8組である。

毎年8組はいつも定期テストではトップを独占状態で、他の生徒からは憧れのクラスであった。

はじめはいつも通り1番遅れて入り「おはよう!」そして1番元気良く教室に入るのだった。

いつもと変わりのない教室の光景が目に入ってきた。

みんながクラス替えで浮かれている中、8組は3年間クラス替えがないのだった。

「おはよう!」クラスいや学年で1番の美人と称される九条あいりが声をかけてきた。

「良いな～はじめ君は頭が良くて」あいりが羨ましそうに言った。

「習熟度試験に向けてみんな早くから学校に来て勉強をしてるのに、はじめ君はいつも通り遅刻ギリギリにきてるし～」あいりは少し笑みを浮かべながら言った。

みんなより数倍の人生を生きてきたはじめは、何を質問しても答えてくれるのでみんなから良く頼られていた。

「ハハハ・・・・」いつもこのように流すのがはじめのお決まりのパターンであった。

「じゃあまた!わからないところがあつたら教えてね!」もうすぐHRが始まるからか席に戻つていった。

クラスの誰一人にも自分が年を取らなくなつた事を打ち明けていた。かつた。

いつもテストでトップばかり取るので、さすがのはじめも少し卑怯な気がして気持ちよくなかったがこれもしかたない事だと自分に言い聞かせていた。

しかし年をとらない「寿命がこない」ゆえの彼の苦悩もあったのだ。

### 3・過去の僕（前書き）

自分の体の不自然さに気づいた

### 3・過去の僕

#### 3・過去の僕

はじめが自分の体の不自然さに気づいたのが初めての旧制高等学校を卒業してから10年ぐらい経つてからである。

はじめは学業に秀でて運動も良くてでき体も丈夫で将来を期待されていました。

戦前と言つてもはじめはある有名な難関大学の「京大学の前身である一高の卒業生で、卒業後は某研究所で研究員をしていて給料もそこそこ良かったのだ。

はじめは普段の生活は少しだらしない所もあるのだが、先のことを見据えて行動ができる、一つの事に向かっての集中力はすごいものであつた。

研究所での仕事といふと政府からの委託された仕事もあつたが自分の研究もできて給料まで貰える、はじめにとつてはこれ程興味深い仕事はなかつた。

そこでこの研究室の研究といふと日本に昔から存在する神話、飲めば若くなる水「おちみず変若水」の研究をしていたのである。

研究所で助手をしていたはじめにはその神話のような水がこの世に存在しないし、作れるはずもないと思っていた。

しかしほじめが勤めだすとすでにその試作品が生み出せられていたのである。

「そもそもなぜいのよつた研究が行われているんだ」

まだ職に就いたばかりのはじめには何も教えてもらえなかつた。

そしてその日保存庫から一本の試作品が消えた

はじめが勤め始めて10年が経ち職場に慣れた頃一通の手紙が来た。それは一高の3年生で同窓会をしようといつ知らせであった。

毎日の研究で休む暇もなく働き続けるはじめは、最近休んでいないしたまには生き抜きも必要かなと、出欠カードに出席と書きこの手紙を出すよつこと後輩に頼んだのであつた。

もつはじめには仕事での部下ができてこたのだ。

しかし周りから見るとその後輩とはじめは同級生いや、はじめの方が年下に見えるほどであり、はじめはそう思われてゐる事に気がつかなかつた。

研究に没頭する毎日であつたはじめは、同窓会の日はワープでもしたかのような速れでやつてきた。

同窓会は休日に行われて場所は卒業した学校の教室であった。

#### 4・同窓会 1(前書き)

はじめは走っていた  
学生時代と今の走っている自分

#### 4・同窓会 1

4・同窓会 1

はじめは走っていた。

「やばい遅刻だ・・・」はじめが走ったのは久々であった。

この年齢になつてこんなに走る羽田になるとは思つてもいなかつた。彼にとつて走るといふ言葉を頭で考えたのが久しぶりだつたのかもしない。

はじめが3年生の時の教室は校舎の3階にあり、はじめは猛ダッシュで階段を駆け上がつた。

今思つと昔は携帯もエレベーターもないし同窓会に相応しい店もない、とても不便であったのだ。

はじめは階段を上つながら昔の自分を思い出して少しおかしくなつた。

「昔からまつたく変わってないや」はじめは自分の学生時代と今の

走っている自分をダブらしていた。

学生時代のように階段を一つ跳ばしでどんどん上がつていった。

息を切らすことなく階段を上つると正面に教室が見えてきて、はじめは突き当たりを曲がり、懐かしさで教室内を見渡しながら自分の田舎の教室を探した。

「ええっと、確かここだつたかな」はじめは少し遠くから教室の番号を見つけた。

はじめは教室のドアの前に立ち一つ深呼吸をして「『めん、遅くなつて』と教室に入った。

どうこうわけかそこには同級生の姿が2人だけしかなかつた。

名前は大橋慶一と田辺ゆう学生時代と一緒に遊んだ一番の友達もあり、学業の成績を競い合つた良きライバルでもあつた

「よお、久しぶり」

「久しぶり」慶一とゆうが言つた。

はじめはこの状況に戸惑いながら、「一人とも久しぶり！」と返した。

「あれ？まだみんな来てないの？」はじめが聞くと

「どうやら招待状が来たのはこの3人だけらしいな」慶一が深く考  
えさせないよつて言つた。

「なんだよそれ」はじめがあわてて聞き返した。

「だつてもう集合時間から20分も過ぎてんだぜ」慶一が頭の後ろ  
で手を組み体を反らしながら言つた。

「どうやら誰かが同窓会を装つて私たち3人が集まるよつて仕組ん  
だらしいね」とゆうが結論らしい答えを言つた。

「誰か部外者によつて仕組まれたとでも言つのか?」はじめが聞くと  
2人がポツリと頷いた。

「なんでまた・・・・」はじめが一ころあたりがないかと考えなが  
ら言つた。

そうしてこるヒドアが聞く音がした。

「君たちよく来てくれた」あきらかに身分の高そうなスーツ姿の男  
が言った。

後ろには2人のがつちりした男が付き添っている。

「どうかね久しぶりに旧友と会った感想は？良いものだろ」

「ここに来てもらつたにもわけがある。」男が続けて話した。

「君たちは選ばれたのだ。これからずっとこの国を支えていく人間として。」

「これからずっと？意味がわからないな」はじめがあきれたように言い放つた。

「君たちはまだ気づいてないのかな？いや忘れてしまっていいるのか？」スース姿の男が言つ。

「何のこと？」田辺ゆうが言葉を返した。

「もうかれこれ10年ぐらい前になるのかはじめ君、君はある研究所に勤めだしたね？」

「当時あの研究所では何の研究をしていたか覚えているか？」男が続ける。

はじめは少し沈黙してから「10年前・・・・確か若返りの薬を・

・・・」はじめの頭の中に答えと共に嫌な予感が頭をよぎった。

その嫌な予感を感じたのは、はじめだけではなかつた。

同窓会 2（前書き）

田辺ゆうは明日の同窓会に向けて早く寝ようと布団に入った。

田辺ゆうは明日の同窓会に向けて早く寝ようと布団に入った。

「あの2人はちゃんとくるかな・・・」

「まあはじめ君は遅れてくるな」少し頬を上げながらゆうは言った。

はじめの遅刻癖は今に始まつた事ではなかつたようだ。

ゆうはうつ伏せに寝転び今してゐる研究の資料を広げて見ていた。

いつしか眠りについていたみたいだ。

翌朝目覚まし時計の音と共にゆうは起き上がつた。

「ああ～うるさい、うるさい」ゆうは目覚まし時計をなだめるようにスイッチを止めた。

カーテンからは光が漏れている。今日は晴天である。

ゆうは晴れた日が大好きで、今日の同窓会を楽しみにしていたらしく鼻歌まじりに着ていく服を選んでいた。

「ふふふ、この服が良いかな～」鏡を見て服を体に合わせながらゆうはオレンジ色の綺麗な服を選んだ。

ゆうの体はスマートで顔立ちも整つていていつも年齢より若く見られるのだった。

ゆうが着替えてこる後姿を映す鏡には確かに何かが映っていた。

ゆうはそれを少し手でなぞつた。

「後は化粧だ」ゆうはルンルン気分で化粧をはじめた。

元から化粧も必要がないくらいに綺麗な肌で整つているが今日は特別らしい。

まるで高校生の初デートの日みたいな感じと言つたら良いのだと思う。

ゆうはしきまきと身支度を整えて時間が迫つてこるので足早に家を離れた。

「今日は、はじめ君と会えるのか、久しぶりだな～」「昔と変わつてないのかな～、もう会えなくなつて10年ぐらい経つもんなあ

「どうやら朝から机嫌だったのは、はじめと会えるのを楽しみにしていたらしい。

ゆうの自宅から程なく離れたところに回収会場がある。

ゆうが門の前ぐらに通りかかると「よお、ゆうでしょ？」後ろから大橋慶一がやってきた。

「慶一？久振りだね、大人らしくなったね」「でも面影は残つてゐる」少し笑いながらゆうは言った。

「そりや～俺ももう立派に大人になつて働いてるしさ」慶一が少しふてくされながら言った。

「じゃあもうすぐ時間だし、歩きながら話す」と慶一は続けた。慶一は正義感が強く集合場所などには必ず数分前に着かないと嫌な性格である。

「ゆうももう化粧しだすよになつたんだ」慶一が言った。

「どう？私年とつた？」ゆうがあわてて聞き返した。

「いや、化粧してゐから大人っぽく見えるけど、よく見たら学生時代から変わってないよ」

慶一が少し驚きながらゆうに言った。

「なら少し安心」ゆうは嬉しそうだ。

2人は校舎に入り階段を一段一段上っていた。

「それにしても全然人影がないね。場所変わつてないよね?」慶一が不安そうに言つた。

「私も思つてた。もうすぐ集合時間だし、ここまで来るのに数人に会つてもおかしくないよね」ゆうも少し不安そうだ。

「まあみんな早く着いて教室で待つてるんだろう、さあ行こう」ゆうを不安にさせないように慶一が言つた。

2人は3階に着くと、自分達の教室を見つけた。

しかし教室内からは人の声もなくとても静かだつた。

「みんな俺たちを脅かそつとでもしてんのかな?」慶一が苦笑いしながら言つた。

「ハハハ、慶一私たちはもう立派な大人だよ。そんな幼稚な事しないでしょ普通」ゆうは慶一の考えに少し笑つてしまつた。

「そりやそりだな」照れながら慶一は言つた。

「じゃあ入りづか」ゆうはそう言いながら恐る恐る教室のドアを開いた。

その部屋は真夜中の教室のようにカーテンは閉まり誰一人といなかつた。

「あら、やっぱり誰も来てない・・・・」ゆうの言葉を聞き慶

一も落胆した。

「とりあえずもう少し待つてみようか、はじめ君がもし来るなら少し遅れてくると思つし」 ゆうが言つと慶一がすかさず

「やうだ俺らが来たといつ」とは、はじめが来る可能性も高い」 そ  
う言つた。

「やうだね～私もそいつ思つ」 ゆうが慶一も同じ考えをもってくれで  
いるので安心した。

時間が経つにつれて2人の会話もなくなってきた。

ゆうが黒板の上の時計を見上げると針は集合時間から20分を過ぎ  
た所をさしていた。

しばしの沈黙が流れていた頃、廊下を走る足音が聞こえてきた。

足音はこの教室のドアの前に止まつたよつて思つた。

少しどアの前で沈黙があり

「いめん、遅くなつて」 ドアが開くと共にはじめの姿が現れた。

「よお、久しぶり」

「久しぶり」 慶一とゆうが言つた。

「の光景にあきらかに少し困惑して、はじめの姿があった。

ゆうから見てはじめはまだおどけなさが残る学生時代と変わりがない姿に見えていた。

「一人とも久しぶり！」はじめが言いつと、少し同様を慮して無理をしながら言つたように見えた。

3人で話していくうちにはじめも落ち着いてきて、この現状について考え出した。

しばしの沈黙が流れ

そつしていふとドアが開く音がしてスーツ姿の男が入ってきた。

ゆうには政府か何かの使いの者に見えた。

そのスーツ姿の男が何やら色々なことを話しました。

君たちは選ばれただの、これから国を支えていくだの、そのような言葉が飛びかっていた。

「君たちはまだ気づいてないのかな？いや忘れてしまつてこるのか？」スース姿の男が言つた。

「何のこと？」田辺ゆうが言葉を返した。

「もうかれこれ10年ぐらい前になるのかはじめ君、君はある研究所に勤めだしたね？」

「当時あの研究所では何の研究をしていたか覚えているか？」男が続ける。

はじめが少し沈黙してから「10年前・・・・確か若返りの薬を・・・・」と頭の中の記憶を呼び起しぶしながら言つた。

ふとゆうつむ自分の事ともダブつてくる」と口づいた。

「田辺ゆう、君も思い当たることがあるだろ？」スース姿の男が言つた。

ゆうはあせりかに下を向いて同様が見える。

「まあ、良いんだ君もやつ後戻りはできない」スース姿の男が続けて言つた。

「さて問題は大橋慶一君、君だね」

今まで何一つ状況がわからなく黙つているしかできなかつた慶一が、急に男に名前を呼ばれ体を反応させた。

「君もこの国を影で支えていく人物になるかね？政府として支援はするつもりだ」

「そして君もこれ以上年を取らなくてすむのだよ」男は良い条件だと満足そうに言つた。

「せつを話してた若返りの水の事か？そんなもんが存在するはずがないんだよ。馬鹿じやないの？」慶一が笑いながら言つた。

はじめとゆつは黙つていろしかできなかつた。

男ははじめの背中に指をさして「慶一君はじめ君の背中を服を上げて見てみる、何かがあるはずだ」そう言つた。

「何か証拠もあるのか？」

慶一はそう言いつゝイスから立ち上がりはじめの服をまくつ背中に田を

やつた。

慶一は言葉が出なかつた。

そこには月の形をした物が刻まれていた。

まだこれといって確信をもてなかつたはじめも慶一の表情を見て確信が本当のものになつた。

「そりかはじめ君は自分の背中の物に気づいてなかつたのか、おそらく鏡なんか見ない生活をしているだらうから自分の成長が止まつているのにも気づいてなかつたようだね」

男が言った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4212e/>

---

はじめ

2010年10月20日19時01分発行